

企業理念インタビュー 第2弾

第2回 取締役（事業企画管掌） 安藤 隆之



Q1. 企業理念の「目指す姿」に「世界一」という言葉が3回出てきます。
「世界一」になったときの光景はどんなイメージですか？

私の世界一のイメージは、オムニ社です。映画『ロボコップ』に出てくる、主役のロボコップを開発した架空の企業です。

当社も、今は外観検査システムの老舗という位置づけですが、将来的にはいろいろな分野で当社のシステムや技術が使われていて、トータルで見たら世界一。世界でVISWILLを知らない人がいない。

何をしているのか、どんな技術なのか、ぱっと見にはよくわからないけれど、いろいろなことに関わっていて、みんなに名前が知られている。そしてそこで働いていたということが、会社を引退したあとも自慢の種になっているようなイメージです。



Q2. 生き生きと働く姿が想像できますね。

以前から「楽しく仕事をする」ということを口にされていました。

その「楽しく」は、どういう意味合いでしょうか？

楽しい＝ラクをする、という意味ではありません。「一生懸命」や「全力」に近いです。

苦しみを経て極める

企業理念の行動指針にも「良くても悪くても結果を出す」とありますが、結果が良くても悪くても、いつか笑い話になったらいいと思います。但し、笑い話にしようと思ったらその瞬間全力を尽しておかなければなりません。自分が一生懸命やった結果、上手くいかなかったらそれはそれで笑えるし、できたらできたで誇らしげに言えばいいし。そういうことが楽しいにつながると思います。



苦しいけどそれを極めて、例えばシェアを伸ばしたり、お客様から感謝の言葉をいただけたらものすごく嬉しく楽しいはず。ラクして感じる楽しさは一瞬のこと。苦しい思いを経た後なら一生笑えます。

Q3. 企業理念ができた5年前と比べて、どういふ変化が感じられますか？

日常的な会話の中で「理念が...」「理念に沿う、沿わない」という声が聞こえてくるようになりました。かなり意識はされているのだろうなと思います。

まだ10個の行動指針全てを守れているわけではないかもしれませんが、意識をしているからこそ、行動も少しずつ変わってきているからこそ、これはできている、できていない、難しい、ということがわかってきます。

理念経営って一朝一夕に出来上がるものではないと思いますが、企業理念を随分身近に感じるようになってきている気がします。朝礼や会議や面談など、いろいろな場面で企業理念について語られてきたし、そのやり方は間違っていなかったと思います。

Q4. では、今改めて、企業理念で一番重要だと思われるところはどこでしょうか？

誇りをどれだけ持っているか、ですね。

5年前、企業理念のどの言葉が一番好きかと聞かれたときに、「誇り、自信、責任をもって行動する」と答えました。一番必要なのは誇りだと思うんです。

堂々と誇れ 新たな価値

当社は外観検査システムのパイオニアです。その礎を築いて来られたのは諸先輩方ですが、そこにいろいろな機能を追加し付加価値を生んできたのは自分たちなのだから、もっと自信を持っていい。現在の販売実績を作り出しているのは自分たちなのだと、やってきた成果はもっと誇ればいい。ただし、誇るということには責任が伴うわけで、そこもひっくるめて受け入れればいいと思います。



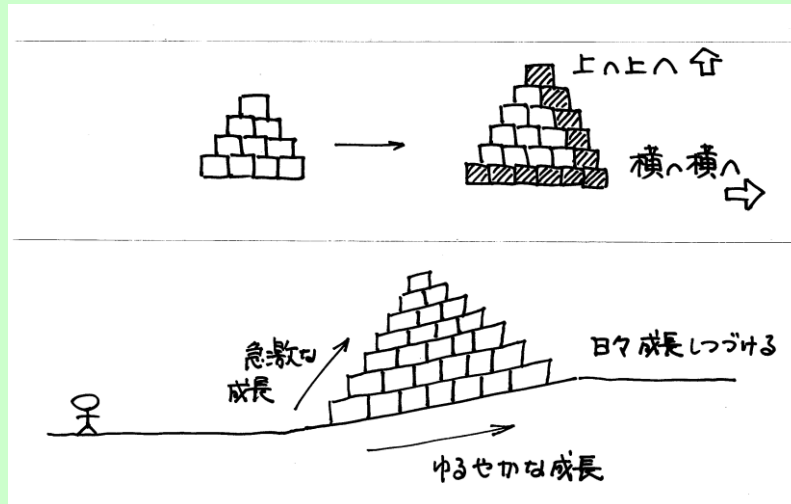
私は入社当時（鐘紡の生産技術研究所時代）カプセル検査機の開発に携わっていました。当時は「この装置の良さがわからない人には売らなくていい」と思っていました。それを誇りと言っているのかわかりませんが、そんな時代でした。

16年前に第一実業ビスウィルになり、理念経営も進んできました。

世界一のモノ創りをしていくには、お客様を笑顔にするには、しっかりとお客様の要望を聴くことが大事です。若い人も含めて、みんなそこはしっかりと認識していて実績

も出しています。誇り、自信、責任は三位一体になっていて、順番としては誇りをもってやっていったら自信と責任がついてくると思います。

Q5. このイラストは、以前社員に説明されたものです。
企業理念と関連がありそうですが、真意は何でしょうか？



上の方は、会社がこうなったらいいよね、横にも上にも大きくなっていけばそれが本来あるべき会社の姿だよね、ということを表しました。下の方は、それを進化させたものです。

成長の階段を上る喜びを

会社って 40 年ぐらい勤めますよね。ほとんどの方は辞める時に「ああ、いい会社人生だった。思い残すことはありません」と言うかもしれないけれど、本当にそう思っている人は限られていると思っています。会社に来て働いていると、自然にレベルが上がるとか、自分がどんどん成長していると感じられる、そんなふうになれば、毎日会社に行くことが楽しみになり、結果として楽しく働ける会社になるんじゃないかというイメージです。

せっかく会社に来ているんだから、働いているんだから。

お金を稼ぐための手段という風に考えずに、お金をもらいながら好きなことができるとか、自分が会社の中で役に立っているということがあった方が、会社が終わってからは楽しい振り返りができるんだろうなと思います。

せっかく会社で働いているんだったら、楽しい、苦しいんだけど楽しい、この間会社でこんなことがあってと会話できて笑い合えとか、本当に辞める時にもう思い残すことはない、でもできればもっと働きたい、そうなったらいいと思います。



<取材後記>

中学時代は生徒会長をやっていた。が、学校を良くしよう、という殊更強い正義感があったわけではない。中高通じて所属していたバスケットボール部も、膝の故障で未練なくあっさり辞めた。大学院に行ったのも、就職を先延ばしして学生生活を少しでも謳歌するため。就職活動も、たまたま開いた就職情報誌で、上から順に知っている名前の企業名を書いてエントリーした。普通なら転職と構えそうな出来事にも、至って淡泊。挫折も挫折と捉えない。

一方で、企業理念に対する感受性は人一倍強い。「楽しく働く」。この誤解を受けそうな言葉は、その本質を会得しているからこそ口にできるのだろう。果たして、企業理念の土台は楽しく働くことにあるのか。

最終回に続く。